

文学コンクール

優秀賞

【論説文】 AI時代を生き抜くために必要な力とは

市川中学校・二年
上田 史比等さん

作品に対する思い・感想

SF映画が好きなので、AIには興味があり、機会があれば、AIの現状を調べてみたいと思っていました。今回、このテーマに接して気づいたのは、AIの可能性を考えることは、人間について考えることだということです。AIという、人間にも代わられる人工物の登場が、皮肉にも、人間の素晴らしさを再認識させてくれるとは。これからも、このテーマについては、考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

『AI 時代を生き抜くために必要な力とは』

上田 史比等

近い将来、人類の仕事の多くが、機械・人工知能 AI に取って代わられるという。カナダの CST というサイトには、「Careers2030」として、西暦 2030 年頃にも取って代わられていない仕事や新しく生まれているであろう職業が掲載されている。2030 年は、遠い未来ではない。僕が 20 代、つまり社会に出て働き始める頃にはもう、そのように変化しているということだ。

ほとんどの仕事を AI に任せて、国が国民のベーシックインカムを保証するという考え方もある。しかし僕は、人間は働きたいだろうと考える。たとえ多くを AI に任せられるようになって、AI に任せられない仕事を見つけて、人間は働き続けるだろう。その時、「未だない仕事」が誕生する。具体的に「未だない仕事」を思いついたわけではないけれども、AI に取って代わられない仕事に必要なチカラこそ、すなわち、「未だない仕事」に必要なチカラである。

では、どのような仕事が、AI に取って代わられないのだろうか。

テクノロジーの進歩で、何かの仕事が消えるのは、珍しいことではない。また、高度な専門性や技術を必要とする職業だからといって、AI に取って代われないとは限らない。AI の特性から言って、むしろそういった仕事も単純な事務作業同様、得意である。CST のサイトにも、取って代わられない職業が幾つか載っているが、僕が一つ思っていることは、「人の感情に深く訴える仕事は、AI に取って代わられない」ということだ。

人の感情に深く訴える仕事とは、既存の職業で言えば、人を感動させる俳優や歌手や芸術家、人を笑わせる漫才師、交渉や説得をする職業もそうだろう。交渉ごとは、AI に任せてしまえば、いつも 50 : 50 か、数学上確率が少しでも高い方に、結論が、それも 1 秒もかからずに出てしまい、交渉自体が成り立たない。元々、そんな単純なことなら、今だって、時間はもう少しかかるかもしれないけれども、自動的に交渉終了となるだろう。しかし実際は、同情や愛情など、心の琴線に触れるところから、交渉ごとは始まるのだ。

「人の感情に深く訴える仕事は、AI に取って代わられない。」そんなことを言ったら、ペット型 AI ロボットや介護ロボットなど、人の心に寄り添うのは、AI ロボットの得意分野ではないかと、一蹴されるかもしれない。確かに、独居老人や孤独を感じている人たちに寄り添って、AI ロボットが活躍している。ただ、そういった AI ロボットと人間の心の交流は、その時々々の応急処置的なものでし

かないはずだ。おばあちゃんに死なれて家に閉じこもっていたおじいちゃんが、介護ロボットと過ごすうちに元気になって、周囲の人とのコミュニケーションを取り戻す。孤独な都会生活者が、ペットロボットに支えられて、友人や恋人を見つける。トイストーリーのアンディが成長して、大好きだったおもちゃのウッディと遊ばなくなるのと同様、AI と人との個人的な関係も永遠絶対ではない。回復や成長の過程においては役立つが、決して十分ではない。ロボットが、どんなに慰めてくれようと褒めてくれようと、完全には満足しない。人間はわかっているのだ。決して自分の思い通りにならない「他人の気持ち」だからこそ、認められた時、通じ合った時、嬉しいのだ。

コントロールできない「他人の気持ち」に影響を与えることの意義を知る、最近、そんな経験をした。道德の授業で、「演芸を創る」ことになり、グループで「お笑い」を実演してコンテストが行われた。

僕は、その「お笑い」のコントに力を注いだ。ネタを精査し、衣装を用意し、セリフ一つ一つを大切に練習した。どう演じれば、どういう言葉を使えば、意外性に驚いたり呆れたりして笑ってもらえるだろうか。このセリフは適切だろうか。間の取り方は。観客の気持ちになって、演じる自分への自己愛は横に置いて、第三者の思考で自分たちのネタを観察した。元々、文化祭で漫才をするほどお笑い好きというのもあったし、コンテストで勝ちたいという気持ちもあった。それに加え、正直言うと、僕はこういう時、みんなにたくさん笑ってほしいと思うのだ。せっかく見てくれるのだから、腹を抱えて笑って、楽しんで、喜んでほしい。サービス精神旺盛というのだろうか。成功しているお笑い芸人の人達も、そうなのではないだろうか。

結果は大成功。たくさんの大爆笑を得た。観客からの評価は高く、直後はもちろん、日を置いてからも感想を伝えてくれる人や「あれお前か」と新たに僕を認識してくれる人もいた。彼らが見て、楽しんでくれたこと、自分の気持ちや工夫が、彼らに届いたことが、実感できて嬉しかった。

さっきはサービス精神と書いたが、人間愛、優しさ、なのだと思う。隣にいる人に、良い気持ちになってほしい。落ち込んでいたら、元気になってほしい。笑って明日を気持ちよく迎えてほしい。そういう気持ちが伴う仕事は、AI に取って代わられることはないだろう。

周囲の人の気持ちを害してばかりいたら、どんなに優秀なエリートでも、リーダーにはなれない。心を伴わない活動は、どれほど技術的に難しくても、高

い知性を必要としても、いずれはAI に取って代わられる。人として、周りの人をいたわり、心に語りかける能力こそが、これからの社会で仕事をしていく上で最も必要とされる力であると僕は思う。